
それでも朝(あした)はきつとくるから番外編

橙子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それでも朝はあしたきつとくるから番外編

【Nコード】

N4908Y

【作者名】

橙子

【あらすじ】

本編ではほとんど語られない面子の話を綴っていかうと思っています。

人生変えちゃう夏かもね（前書き）

貴絵と達の馴れ初め話です。初々しいふたりをご堪能ください。

人生変えちゃう夏かもね

それは、ちょっとした噂から始まった。

「聞いたか？ 六組の志野田しのだがうちのクラスの山下を好きらしいってよ」

「貴絵、噂…聞いた？」

中学二年に進級してすぐの春。親友の有川夕映ありかわゆえが訊いてくるのに、山下貴絵やましたきえは軽い調子で手を振って答えた。ポニーテールにしたセミロングの髪が、その後頭部で揺れる。

「デマに決まってんじゃん。志野田つてあれでしょ？ 学年一位を毎度キープしてる秀才の。そもそも顔と名前しか知らないような相手よ？ 一度も口をきいたことない相手に、どうやったら好かれるっていうのよ」

「わかんないわよ？ どこかで貴絵のいいところを見て好きになっちゃったとか、あるかも知れないじゃない」

「ないない。少女漫画の読み過ぎよ」

などと話していたから。それから数日経ってからの授業終了時に、夕映がかけてきた声にも普通に答えていた。

「貴絵ー、次の授業って体育よね、更衣室行こうー」

「あ、ごめん、あたしいまの授業で教科書忘れて六組の理奈ちゃんに借りてきたから、返してから行かなきゃ」

「お、山下、六組に行くのか？」

ついさっきまで授業をしていた教師が声をかけてくる。

「それがどうかしました？」

「ちょうどいい、志野田に職員室の俺のところに来るように言っていてくれや」

「えーっ」

「頼んだぞ」

言いたいことだけ言ってさっさと出ていかれては、断ることもできない。ついでだし、仕方がないなと思いつつ、体操着とシューズの入った袋と借りた教科書を持って六組に向かう。

「理奈ちゃん、これ助かったわ、ありがとうね」

「どう致しまして」

無事教科書を返してから、六組の教室内を見回す。

「貴絵ちゃん、どうしたの？」

「うん、ちよつとね…あ、いたいた。志野田ーっ！」

ちよつと離れたところで他の男子と話していたある男子の姿を認めて声を張り上げたたん、教室内が一瞬静まり返って。向けられる複数の視線に何となく居心地の悪さを感じながら、貴絵はこちらに向かつて歩み寄ってくる少年の姿をじっと見つめていた。たまに姿を見かけるだけだったからよく知らなかったけれど……少し茶色がかつたやわらかそうな髪の毛、他の男子より少々背が高めの少年だった、志野田達しのたとあるという少年は。

「…なに？」

眼鏡の奥の瞳と声はクールそのもので、やはり自分とはまったく違う世界の人間だなと貴絵は思った。

「三田村先生に、職員室に来るように伝えてくれって頼まれたのよ。確かに伝えたからね、じゃあ」

言うだけ言って、返事も待たずにあっさりと貴絵は六組を後にする。何故自分があんな居心地の悪い思いをしなければならぬのかと思ひながら。

それから。

「先生、今日の日直ですけど何のご用ですか？」

昼休みの職員室。午後一の授業の担当教諭の元に訪れた貴絵に、教師が不思議そうな顔を見せた。

「あれ？ 山下、何で一人なんだ？」

「同じく日直の吉田くんは、気分が悪いって言って午前中で早退したんです」

「そうか…でもお前なら一人で大丈夫かな」

「は？」

教師が渡してきたのは、一枚の紙片。

「今日の授業で使う資料なんだが、授業が始まる前に図書室から持ってきておいてくれ」

「えっ これ結構量ありますよ、いくら何でも一人じゃ…！」

「無理なら、誰か他の奴に手伝ってもらえ」

取りつく島もない。だいたいいまのこの時間では、一度教室に戻って図書室に行っていたら、絶対授業に間に合わない。仕方ない、一人で何とかするしかないかと思い、貴絵は図書室へと急ぐ。

どうも一部の教師や男子たちは、貴絵を女の子扱いしていない節がある。いくらスポーツ万能で他の女子より体力があつて、家が道場を営んでいるからといっても、貴絵とて普通の女の子なのだ。いかにもか弱い女の子といった風情の——ほんとうはそれだけではないことを、貴絵はよく知っているのだが——夕映だったならちやほやするくせに、貴絵相手となるとたんにぞんざいになる連中に、貴絵は内心で怒りを押し殺す。

案の定、資料を全部揃えたら、かなりの量で。いかに貴絵といえ

ども、一人ではかなり辛い重量となっていた。だから言ったじゃないのと思いつつ、まとめて持ち上げようとしたその時。貴絵の眼前にあった資料の本が、半分弱の量に突如減った。消えたとかいうことではない。横から伸びてきた二本の腕が、ひょいと上部にあった本を取り上げたせいだ。

「え？」

思わずそちらを見た貴絵の目に映ったのは、先日初めてまともに口をきいたばかりの少年——志野田達が立っていた。

「時間、ないんだろ？ 手伝うから、さっさと運んじまおうぜ」

それだけ言つて、貴絵の返事を聞かずに志野田は図書室から出ていこうとする。

「ま、待つて……！」

残りの本を持って、貴絵も慌てて後を追う。

「何で手伝ってくれるの？」

「俺も用事があつてたまたま図書室にいたからさ。ついでだから」

そっけない口調。けれど、貴絵は気付いていた。つい先刻、職員室にいた時に他の教師と話している志野田の姿を、自分の視界の端でとらえていたことに。図書館にいたなんて、嘘ばかり。貴絵が大変そうなのを聞きつけて、わざわざ手伝いにきてくれたのだろうか？

「…ありがとう。志野田って、冷たい奴かと思ってたけど、案外親切なんだね」

「俺、普段どんな目で見られてんだよ」

ほんとうに他愛のない会話だったけれど。胸の奥が何となくあたたかくなってくるのを、貴絵は確かに感じていた。志野田のクラスである六組では、「一組の山下が志野田を好きらしい」という噂が流れていると理奈に聞いたのは、その、直後のこと……………。

驚愕の真実が明かされたのは、その二日後のことだった。隣のクラスの篠原という名の少年と、五組——志野田の隣のクラスの山上という名の少女が付き合い始めたというのだ。噂はあっという間に学年中に広まった。

「なあんだ。『しのはら』と『しのだ』、『やまがみ』と『やまし』の間違いかあ」

「変だと思っただよな、志野田と山下が、なんてさ」

皆、好き勝手なことを言っている。

「貴絵…………」

何となく心配そうな顔をしている夕映の前で、貴絵は何も気にしていないような顔でにっこりと笑ってみせる。

「だから言っただじゃない、デマに決まってるって。あー、スッキリしたっ」

胸のどこかで隙間風が吹いているような、そんな淋しさを感じたのは、夕映にも言えない事実だったけれど。こんなもの、時間が経てばきつと消えてなくなってしまうに違いない。そう思いながら貴絵は、自分でもよくわからない感傷を胸の奥にしまい込んだ……。

その後しばらくは、志野田との接点もなくて。季節は、初夏を迎えようとしていた。貴絵たちの中学では、毎年この時期に球技大会が開催されるため、夕映と共にバレーボールを選択した貴絵は、体育館で別のクラスとの試合に臨んでいた。勉強はともかく、スポーツなら貴絵の見せ場といっている。まさに独壇場といえるほどの活躍で——自分だけが目立つようなことばかりでなく、他のチームメイトのフォローやアシストも忘れない——ストレートで自クラスを勝利に導き、チームメイトや応援の女子と共に喜び合う。

「貴絵、すごいっ」

応援席で声援を送っていた夕映も嬉しそうだ。そんな夕映に笑顔で応えてから、貴絵は体育館を出ていこうとする。

「貴絵、どこ行くの？」

「顔洗いたいんだけど、そのへんの水道は混んでるじゃない？ 穴場のところ知ってるんだ、そこ行ってくる」

「あたしももう少ししたら試合なんだ、そこ後で教えてねー」

「おっけー」

夕映と別れて、靴を履き替えて表に向かう。適度に汗をかいて火照った身体に、初夏の風が気持ちいい。持参のタオルをもてあそび

ながら、貴絵は件の水飲み場へと向かう。あとはその校舎の角を曲がるだけだというところで、聞こえてくる水音。珍しい、自分以外にここの存在に気付いている人間がいるとは思いながら、角を曲がる。

それは、ひとりの男子。荷物置き場のようになっている、いくらか高い所に眼鏡を置いて、バシヤバシヤと顔を洗っている。何年生かはわからないが、サッカーを選択した男子だろうか。長めの前髪や横の髪が顔にかかっている、顔まではわからない。濡れた顔を下に向けたまま、荷物置き場を手探りでまさぐって、何かを捜している気配。もしかして、タオルを持ってきていないのを忘れているのだろうか。戸惑っているような相手の姿を見て、誰とも知れない少年に貸すのは抵抗があったが、困っているのを見過ごす訳にもいれない。この人の好きが自分の弱点かとも思いつつ、「はい」とだけ言って少年に自分のタオルを渡す。

「あ、ありがとう」

貴絵のタオルで顔の水滴を拭った少年が、ふいに顔を上げる。その顔を見て、貴絵は驚いてしまった。眼鏡こそないが、その顔は見覚えのある志野田少年のものだったからだ。

「……山下？」

あちらも、貴絵の顔を見て驚いたようだった。

「あ…これ、サンキュ」

「いーえー」

タオルを受け取って、何となく志野田から水道一つ分空けた所の

カランに手をかけた所で、横からかけられる声。

「……………山下は、どこの高校受けるかもう決めているのか？」

唐突な質問に、貴絵の手が止まる。

「ハッキリ決めた訳じゃないけど……………夕映と同じD高校に行けたらいいなっと思ってる。あたしの頭じゃ、その一、ニランク下のU高やH高くらいしか行けないかも知れないけどね」

情けないけれど。たはは、と笑いながら答える。

「『夕映』って、有川か……」

さすがに夕映の名は知っていたか。自分と違って、夕映は学年でベスト20に入る成績だし。

「もし、勉強で困ることがあったら……………俺のどこに来いよ。教えてやるから」

眼鏡をかけながら、予想もつかないことを言い出す志野田に、貴絵は思わずそちらを向いてしまった。

「なん……で……？」

彼と自分は、別に友達でも何でもないのに。すると彼は、一瞬困ったような顔をして、それからすぐにニツと笑ってみせた。

「別に。ただ、お前と同じ高校に行ったら面白そうだなと思ったただだよ。タオル、サンキュ。じゃあな」

そう言うだけ言って、志野田は走って行ってしまったから。後には、訳がわからずに茫然としている貴絵だけが残される。

え？ いったいどういうこと？ 「面白そう」って何？ 友達としては面白そうだけど、女の子としては見てないってこと？ もう、何が言いたいのかわかんないわよっ これだから、頭のいい奴はっ

何が何だかわからないまま、内心でぶちぶちと文句を並べる。だから、気付かなかった。その言葉こそが、頭脳こそ明晰なものの、自分の中に初めて芽生えた感情すら解明しきれない志野田少年の、それでも精いっぱい意思表示だったということに。

それに気付くのは、それから約二年後の…… 夕映と志野田少年の助力に支えられ、何とか同じD高校に入学し、同じクラスになった彼に告白された夏のこと。

——その後の貴絵の人生を変える夏になったことは、言うまでもない……………。

人生変えちゃう夏かもね（後書き）

互いに意識し合ってから好きになるまでにどんなことがあったのかは…
そのうち書くかも知れないし、書かないかも知れません（どっちだよ）。

僕を照らす月の光（前書き）

市原メインのSSです。

僕を照らす月の光

初めて逢った頃から、何故だか心惹かれていた。

その気持ちを何と呼ぶものなのか、気付いたのは最近だったけれど。

そんなことを思いながら、職場の廊下を歩いていた市原希は、いちばらのぞむ開け放たれたままの出入り口の向こうにひとりの女性の姿を見出し、口元にふと笑みを浮かべてしまう。つい最近、彼が想いを自覚したばかりの相手——有川夕映だった。

生真面目で融通がきかず、お固いだけの女性かと思っていたけれど、ふとした時に見せる気を抜いた時の表情が可愛らしく、さりげない優しさ——決して相手に負担をかけないように、気付かせないようにフォローする細やかさに気付いてつい目で追っているうちに、いつの間にか希の心の中で誰よりも大きな割合を占める存在となっていた。そんな彼女に、付き合っている男がいると知った時の嫉妬の炎は、彼女本人の口から真実を聞いたいまでも、希の胸をちろちろと焦がして消えることはない。恐らく、彼女が例の彼から解放されるその時まで、消えることはないのだろうと自分でも思う。

「のぞむっちゃんてば、何見惚れてるの〜?」

にやにや、と擬音でもつけたくなるような楽しそうな声が、背後から耳元に届いたのは、次の刹那。

「!!--」

驚いて振り返ると、記憶の中にあるその姿よりかなり大人っぽくなった相手が、人の悪そうな笑みを浮かべてそこに立っていた。昔は毎日と喋っていたいいほどに会っていたというのに、いまではほとんど顔を合わせる事がなくなっていた、懐かしい存在だ。

「芳本警部補：驚かせないでくださいよ」

非難がましい瞳と口調で告げるが、相手はまるで気にする様子もなく、希が見ていた方向に視線を向けて、ようやく得心がいったという顔を見せた。

「ああ、あのコを見てたのね……」

「よ、芳本警部補！ ご案内致します、どうぞこちらへっ！！」

相手の言葉をかき消すようにより大きな声で言いながら、彼女を連れて離れた場所へと歩き始めた。行き先などどこでもよい。とにかく、他の人間に会話を聞かれなければよいのだ。

希が選んだのは、建物の端のほうに位置する資料室。ここならば、そう滅多に人が訪れないので、個人的な込み入った話をして大丈夫だろうと判断したのだ。

「どうぞ」

言いながら、自販機で買ってきたカフェオレの缶を渡す。「ありがとう」と言っただけを受け取った相手は、昔とまるで変わらない笑顔を見せた。昔は長くしていた髪をいまはぱつぱりと短く切つて、その美貌もスタイルも以前とは段違いになって、まるで宝石の原石が磨かれて本来の輝きを放つように美しくなった相手だが、中身は昔と大して変わっていないようだ。それは、国家公務員採用試験一

種に合格し、いわゆる「キャリア」と呼ばれる立場になって大学卒業後警視庁の警部補となつたいまでも変わらないようで、プライベートルトの時にはこうして人懐こい笑顔を見せてくれる。

そんな相手と、希がどうして知己の仲かというと、単に彼女が希の姉の昔からの親友であつたから、という事実が存在するからだ。希が警察官を目指したのは、昔からの夢だと話していた彼女の影響もないとはいえないが、何より大きかったのは子どもの頃から街中などでよく見かけた白バイ隊員への憧れであつたことも、まぎれもない事実。

「あら、希くんてはブラックなんて飲むようになったの？　大丈夫？　無理してない？」

「無理などしていません」

そう。実際無理などしていない。希ももう成人して久しいのだ、いつまでも子どもの頃のままではない。

「やあだ、敬語なんてやめてよー。昔みたいに『みっちゃん』って呼んでよー」

「まがりなりにもここは職場ですので、公私の区別はつけるべきだと思いますが」

姉のように慕う気持ちはいまも変わらないが、個人的な知り合いだからといって馴れ合うのはさすがによくないと思ったので、彼女だけ近くの堅い箱に腰を下ろさせて自分は立ったまま缶コーヒを喉に流し込む。そんな希に一瞬拗ねるような表情を見せた彼女だったが、すぐにいたずらっぽい笑顔を浮かべて、希を見上げてきた。

「ね、さっきの彼女って、希くんと同じ交通課の有川さん……でしょ？ 相棒の山下さんと並んで、本庁でも男性職員たちの話題にのぼることが時々あるのよー」

「っ！」

その言葉を聞いた瞬間、予想もしてなかったがために、希は気管にコーヒーをうつかり流し入れてしまい、非常に苦しい思いを味わうこととなった。

「ちょっと、大丈夫!？」

心配そうに声をかけてくる相手に片手を上げて応えながら、懸命に平静を取り戻す。

「勘弁……してくれよー……」

何とか落ち着いてから、思わず敬語を忘れて呟いた言葉に、相手の瞳が輝いた気がした。

「やっぱり、彼女のこと好きなの？ 彼女、仕事ぶりも性格も評判いいみたいだしねー。初めて会った時はあんなに小さかった希くんが、そんな風に恋をするようになるなんてねー、恵と一緒^{めくみ}にずっと見守ってきたんだもの、感慨深いわー。で？ もう告白とかしちゃったの？」

もう、こうなると逆らう気力すらわいてこない。ちなみに「恵」とは希の姉の名で、短大を卒業して勤め始めた会社での同期の男性とつきあっており、婚約も時間の問題かと言われている。

「告白はしたけど……まだまだ問題があつてね。いまのところ、向こうが落ち着くのを待ってるところ……って感じかな。それ以前に、まず俺を男として意識させるのが先かも知れないけど」

「あらあら。希くんも苦労してるのねー。あたしにできることがあつたら、何でも言つてね、協力は惜しまないから」

「いや、それには及ばないと……思います」

現状を思い出して、途中から言葉を改める。

「やだ、もう戻っちゃった、つまんない」

彼女がまた拗ねたような顔を見せるが、見なかったことにする。

「それより、お約束していただきたいことがあるのですが」

「わかつてるわよう。彼女のことは内緒にっていうんでしょ？大丈夫よ、恵にも秘密にしておくから。婚約前の大事な時期に、心配かけたくないものねー」

「快いご承諾、感謝致します」

「ところで」

資料室を出る前に外の人の気配を探っていたところで——共に出るところを目撃されて、誤解されて夕映の耳にでも入れられたらたまらないからだ——彼女が再び口を開く。

「有川さんて、下の名前は『夕映』さんっていうんじゃない？」

「そうですが……それが何か？」

「知ってる？ 『ユエ』って中国語で月を意味する言葉だってこと」

「……！」

月——言われてみれば、ぴったりの気がする。いつも彼女のそばにいて、明るく場を和ませる貴絵を太陽だとするならば、静かに、けれどいつも皆を見守って困った時にはそつと導いてくれる夕映は、確かに月といえるかも知れない。恐らくは、本人にはその自覚はないだろうけど。

「…警部補は、博識でいらっしゃるんですね」

「だって、自分の名前のことですもの」

そう言つて、彼女——よしとみつき芳本美月は楽しそうに笑う。

資料室を無事出してから、署長室へと向かう美月を見送つて、希は自分のホームともいえる交通課へと戻る。まず目に入ったのは、やはり誰よりも愛しい彼女の姿。やはり、自分は彼女のことを好きなのだと再確認する。

「有川、今朝の書類のことで質問があるんだけど、ちょっといいか？」

「なあに？ 市原くん」

——大丈夫。たとえ何があっても、彼女の笑顔があれば自

分はきつと、乗り越えて行ける。そんな想いを胸に、希はゆっくりと彼女に向かって歩き始めた……………。

僕を照らす月の光（後書き）

いままで書いたことのない市原の胸の内です。
果たして、彼の想いは夕映に届くのか？

彼氏彼女の内緒話（前書き）

「それ朝」メイン唯一のカップル、貴絵とトオルの逢瀬の様子とは
…？

「それ朝」初のR指定話です。

彼氏彼女の内緒話

——ドアの前でノックを三回。それが、ふたりの合図。

「はい」

中から響くのは、聞き慣れた低い声。面識を持ち始めた少年の頃とは全然違う、すっかり大人のものと化した声。

「やほー」

ドアが開くと同時に、軽く手を振りながらいつものあいさつを告げると、いつもと変わらぬホッとしたような笑顔。

「お疲れ。今日は暑かっただろ」

細めのフレームの眼鏡をかけて一見クールに見えるその顔が、優しい笑みを浮かべて労わるような言葉をかけてくれることを、知る者は少ない。頭脳明晰で冷静沈着な彼に、皆気後れしてしまうのか、彼の懐の奥深くにまで飛び込んでくる者が少ないからだ。けれど、恋人として既に五年も付き合い続けている彼女——やましたきえ山下貴絵

は、彼の外面も内面もほとんど把握しているといっている。だからこうして、彼の夜のアルバイト——近所の小中学生の家庭教師だが——がない日には、仕事帰りに立ち寄るようにしている。

そしてここは、弁護士か検事を志す彼のために、両親が家屋の敷地内に建ててくれたという勉強部屋という名のプレハブ小屋。体育会系の弟たちがいる母屋では、彼が勉強するのに妨害にしかならないだろうという配慮からだった。そして、夜通し勉強や課題をすることもある彼のため、簡単なシャワールームやトイレ、ベッドすらも置いてあるこの部屋は、もはや食事以外の彼の自宅といってもいいだろう。

「ほんと、日に日に暑くなってくわあ。そろそろ駐禁の取り締まりもキツくなってくるから、やだなあ」

言いながら靴を脱いで、慣れた様子で貴絵は中へと歩み入っていく。彼女が心身ともに安心してすべてを委ねられる相手――
志野田達の匂いを、胸いっぱい満喫しながら。

「あ、レポートやってたの？ 今日はお邪魔だったかな？」

「いや、まだ期限に余裕のあるやつだから大丈夫。暇だったんで手をつけ始めてただけだよ」

「ならいいけど。…あーっ もう、汗でベタベタで気持ち悪いっ シャワー貸してー」

「どうぞ」自由に」

了承を得るが早いのか、貴絵はバッグを放り出してシャワールームに向かいかけて、その手前のクローゼットから事前に置いてあった自分の着替えを取り出す。こういうこともよくあるから、着替えはいつでも常備してあるのだ。

着ていた衣類を脱ぎ捨てて、シャワールームに飛び込むや否や、頭から熱いシャワーを浴びる。汗と一緒に、今日一日の疲れが流れていくようで気持ちがいい。全身の汚れを洗い流して出てくると、部屋に備えてある小さな冷蔵庫から達が缶ジュースを渡してきてくれたので、嬉しく思う心のままに笑顔で礼を告げてさっそく一口。夏用のラフなマキシ丈のワンピースに着替えて、仕事中はアップにしている髪も完全に下ろしたので、ほんとうに家——というには語弊があるが——に帰ってきた気分になって、ホッとすると、そんな貴絵を満足そうに眺めていた達が、ふいに机から立ち上がった、自分が着ていたＴシャツを脱ぎ捨てた。

「俺も、シャワー浴びてきちまう。今日は一番暑い時間に帰ってきたから、結構汗かいちまっただよな」

「行つてらっしゃーい」

シャワールームに消えた達を見送ってから、達のベッドに寝転んで雑誌をパラパラと流し読みしていた貴絵は、仕事の疲れからかそのうちうたた寝をしてしまっていたらしい。うつ伏せで寝ていた背中に唐突に感じた、決して重過ぎない負荷で目が覚めた。

「あ、れ……？ あたし、寝ちゃった？」

「ああ。ひとのベッドでとんでもなく気持ちよさそうにな」

「あははー、ごめーん」

達も本気で怒っている訳ではないのがわかってから、楽しそうに笑いながらころりと向こう側に転がる。親戚の人が「次に引越すのは和室しかない家だから」と言つて譲ってくれたというセミ

ダブルのベッドは、貴絵と達の体型なら十分余裕で並んで寝転がれる広さで。貴絵の上に覆いかぶさるように乗っていた達も、ころりとその隣に寝転がった。

「やっぱり仕事大変なのか？」

「んー。肉体的な辛さというより、精神的な忍耐力のほうを試されるかな。だって、自分が違反したから捕まってるってのに、逆ギレする人多過ぎ！ こっちまでキレないようにするのも結構大変なのよ？」

「ストッパー役の夕映ちゃんの苦勞がしのばれるよ」

苦笑いする達に、貴絵はぷうと頬をふくらませて、すねたような口調で言いながらそっぽを向いた。

「ふーんだ。どうせあたしは、短気ですよーっだ」

達に近い側とは反対側の頬に、のばされる大きい手。

「言い方を変えれば、裏表のない性格ってことだろ？ そんなお前だから、俺は安心してそばにいられるんだってこと、いい加減に覚えろっつの」

言い終わると同時に、唇に落とされる優しいキス。

まったくもう。トオルってば、口がうまいんだから。やっぱり検事や弁護士に向いてるわよね。

そんなことを思いながら、キスを受け止めつつゆっくりと達の首へと両腕を回す。それに気付いた達が、みずからの眼鏡を外してサイドボードに置いて……貴絵の浮いた背中とベッドとの間に腕を差し入れて、強く抱き締めてくれる。貴絵が一番ホツとする、安らぎのひと時だった。

やがて、舌先で唇をノックされて、目を閉じたままで唇をそつと開くと同時に口内にゆっくりと入り込んでくる相手の舌。それに応えて舌を動かしているうちに、いつの間にか胸元に伸ばされている……やはり優しい手のひら。どんなに余裕がない時でも、達の貴絵に触れる手は優しい。服の上からゆるやかに触られているだけで、貴絵の中の何かに小さく火が灯って、やがてそれは己の身を焦がすのではないかと思えるほどに熱い炎になっていく。

「…あ…っ」

唇が離れると同時に思わず吐息をもらした貴絵の視界に、楽しそうに微笑む達の顔。何となく悔しくて何か言ってやろうと思ったたん、首筋に唇を当てられて結局何も言えなくなってしまう。それなりに長い年月を共に過ごしてきた達には、貴絵の弱いところなどお見通しということだ。

「このワンピース、似合っていていいけど……脱がすのにはちょっと面倒くさいかな」

「すけべ」

「俺だつて男だからな。人並に性欲ぐらい持ち合わせているさ。単に、滅多に人前で表さないだけで」

「そういうの、何ていうか知ってる？ 『むつつりすけべ』って言うのよ」

皮肉気に言つてやったとたん、スカートの中、貴絵の内股を突然手のひらが撫でてきたので、びくりと身を震わせてしまう。

「あ…っ！」

「そういう滅らず口をたたくいけない子には、お仕置きだな」

こんの…隠れドスっ 巨大な猫被り俺様っ 惚れてる相手じゃなかったら、とつくの昔に再起不能にしてやってるところよっ

武道の有段者が言うには恐ろし過ぎることを思いながらも、身体はすっかり達の手に翻弄されていて、気付いた時にはワンピースはすっかり脱がされてベッドの下だった。完全に下着のみの姿にされた貴絵の脚の上に陣取っているのは、いつの間にか自分も着ていたラフな服を脱ぎ捨てて下着一枚になった達の姿。

「このワンピースをそんな簡単に脱がせられる人なんて、そうそういないわよ？ やっぱりよその人よりえっち度高いんじゃないの？」

けれど、達も堪えない。

「…そうか？　だけど、そんな俺でも好きなんだろ？」

「…っ」

こんの自信過剰男、と思うけれど、否定しきれないのはやはり惚れた弱みがあるから。いつの間にか背中にも手を回されてホックを外されたブラをずらされて、茶色のやわらかな髪が胸元に触れる感覚がくすぐつたい。それはすぐに、快感へととってかわられてしまうけれど。

「あ…やんっ」

胸の頂を舌と唇でもてあそばれると同時に、もう片方の胸を優しくこねる大きな手。時折指先で先端に刺激を与えてくるその隙のなさ、貴絵を快楽の海へと誘ってくる。

「あ、はあっ」

もはや意味のある言葉など発せなくなっている唇に、再び触れるやわらかな唇。頬に、額に、脛に落とされたそれは、そのまま首筋や鎖骨をなぞり、ぞくぞくする感覚を貴絵へ与え、その頭から思考力を奪っていく。またしても胸元を蹂躪し始めると同時に、太腿に伸ばされる手。既に力が入らなくなっている両脚をそっとこじ開け、下着の上から敏感な部分にゆっくりと触れる。

「！」

「可愛い…貴絵」

普段はめつたにそんなことを口にしないくせに、こういう時には大サービスで口にするんだから。

手で、舌で、肌をなぞり、貴絵の中の熱を高めていく。中でも下着の中に埋められた指が、強弱や緩急をつけては貴絵の快楽を引き出し、呼吸さえもままならないほどに彼女を翻弄していく。思えば、最初の頃からそうだった。初めてだと語ったわりには、女の身体のあるこれをよく知っていて、ほんとうに初めてだったのかといまでも貴絵に疑いを持たせることがあるほどだ。彼の内面を知れば知るほど、彼がその淡泊そうな見た目を裏切って、実は肉食獣のような本性を隠し持っていることに気付いたけれど、こんなこと、親友の夕映にすら話せることではない。異性とそういう意味でつきあったことのない彼女には、きつと刺激が強過ぎるだろうから。

そんなことを考えていた貴絵の胸先に、小さく走る甘い痛み。達が軽く甘噛みしたのだ。

「い…っ」

「こーら。他のこと考えてたろ。いつも言ってるだろ、何かする時は集中しろって」

普段は勉強や武道の鍛錬の時に言うセリフをここで口にするとはい…何だか可笑しくなって、くすりと笑ってしまふ。

「やっぱりすけべ」

「何とでも言え」

気付かないうちに脱がされた下着をベッドの下に落とされて、大

きく脚を広げさせられた貴絵の中心に、更に深く埋められる長い指。

「あ…や、は…っ んっ ああっ」

思わず両手を伸ばして達の首へと抱きつくと、やはりいつの間にか下着を脱いで準備万端になっていた彼自身が目に入った。自分の身体や反応のために彼がそうになっているのかと思うと、何だか嬉しくなってくる。

「あ…トオル… トオ、ル…」

「貴絵… 貴絵……」

巧みな指使いに、貴絵はもはや自分の限界に近いことを悟った。

「トオル… お願い……」

いくら経験があるといっても、女の口からはそれ以上言えない言葉もある。けれど達には、それで十分通じたようだった。

「ん… わかった」

心なしかわずかに切羽詰まったような息を吐いて、達が貴絵の中へとゆつくりと入ってくる。それによってもたらされる快楽に、貴絵の身体が大きく震えた。思わず息をついた唇に、捧げられる優しいキス。唇が離れると同時に、開始される激しい律動。もう、互いに声を抑えることはできなかった。

「あっ ああっ！ ト、オ…」

「き、え……！」

ベッドがきしむ音とふたりの声以外何も聞こえない室内で、ふたりの熱が溶け合っていく……………。

*

*

*

「え。例の同僚くんが？」

後処理を済ませ、再び貴絵の隣に横たわった達が、驚いたように眼鏡の奥の目を向けた。

「うん。夕映を庇って一緒に階段から落ちたらしくて。現場は大騒ぎだったみたいよ」

その場に貴絵はいなかったの、たまたま居合わせた他の署員や後から夕映本人に聞いた伝聞でしかないのだが。

「おかげで夕映もかすり傷で済んで、市原も軽傷で済んだらしいんだけど…」

「マズい、かな」

「何がマズいの？」

「暁さんだよ。ただでさえ職場も違って普段一緒にいられないつてのに、ライバルにそんなポイントをかせがれたんじゃ、暁さんにしてみたら不利じゃなか」

「あ、そうか、それもそうね」

市原は元より、暁が夕映に本気になったと達から聞いたのは、つい最近のことだった。

「女の子にあそこまでマジになった暁さんを見るのは、何年ぶりかなあ。最近おとなしくしてた分、もっとガンガン行くかと思ってたけど、意外に慎重なんだよな。それだけいままでよりよっぽど真剣ってことなかな」

「そこで市原がこれじゃあ……夕映もいま揺れに揺れてるでしょうねえ」

ただでさえ経験が少ないのに、そこにきてこれでは……親友の心情を思うと、何だか同情したくなってくる。貴絵だって、かつて達一人だけが相手であってもあれだけ混乱したというのに……。

「——ま。ほとんど部外者の俺たちには、たいしてできることもないけどな」

冷たいと思われそうだが、達の言うことももつともなのである。当事者はあの三人なのだ。彼ら自身から相談でも受けない限り、ふたりが何をしようとしても、それはただのおせっかいではない。

「そう、ね。夕映から相談でもしてきたら、それこそ親身になってアドバイスでもしたげるとこなんだけど」

それでも、決めるのはやはり夕映自身でしかないのだけど……。

「まあ、あっちのことはとりあえず当事者にまかせておいて……」

再び、外されてサイドボードに置かれる眼鏡。

「こっちはこっちで、存分にその先に行かせてもらおうじゃん」

言っが早いのか、再び貴絵の裸の胸に伸ばされる腕。

「え、うそ、もう一回!？」

「もう一回で済むと思うか？ 先週から会えなくてたまりまくってるんだから、今日はとことんつきあってもらうからな」

「普通、久々の恋人との逢瀬で男の本音をそこまでぶっちゃける？」

「いいじゃん、他で発散させるよりは。ある意味純愛だろ？」

まあ、言われてみればそうかも知れないが……ここまで開き直って言われてしまったら、いっそすがすがしいとさえいえるかも知れない。もう反論する気も失せて、貴絵はもう笑ってしまうことしかできなかった。

「もう好きにして……」

「よし、根性見せろよー？」

くすくすくす。もう、笑いが止まらない。夕映も、もしかしたら

暁さえも知らないかも知れない、達の本性。そんな彼を知っているのは、自分だけかも知れない。けれどそれが決して嫌な訳でもなく、むしろ優越感さえ抱いてしまう自分は、もしかしたらもう手遅れなのかも知れないと思いつつ、彼の若い情熱を受け止めるべく、貴絵は気合いを入れ直すのであった……………。

彼氏彼女の内緒話（後書き）

暁とは真逆に、草食系と見せかけて実は肉食系だったトオル。
夕映は永遠に知らないほうがいい事実でしょう（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4908y/>

それでも朝(あした)はきつとくるから番外編

2011年12月2日17時58分発行